

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4090100308		
法人名	株式会社 EPO		
事業所名	グループホーム えん(さくらユニット)		
所在地	北九州市門司区田野浦二丁目9番33号		
自己評価作成日	令和3年9月31日	評価結果確定日	令和3年11月15日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報の公表制度のホームページで閲覧してください。

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/40/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ヘルスアンドライツサポートウリズん
所在地	福岡県直方市知古1丁目6番48号
訪問調査日	令和3年10月28日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

・長引くコロナ禍の中、感染対策に気の緩みが出ないように定期的に感染予防研修など行い対策に努めてきた。面会も禁止の状態が続き、ご家族にもご理解とご協力をして頂いている。外出や地域行事への参加もできないため、施設内の行事においては感染対策を行い、十分に楽しんでいただけるように工夫し実施した。夏祭りではご自分で選ぶ・選択する楽しみを味わっていただくために昼食を選んだり、買い物ができるようにして楽しんでいただいた。また、今年度は管理者研修や㈱EPOの全職員を対象とした経営理念伝達研修を行っており、職員が理念を理解し同じ方向に向かってより良い支援が行っていただけるように取り組んでいる。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

経営理念の「介護の仕事に夢とプライドを」を全職員と共有しながら、基本方針である5つの「えん」の具現化に取り組んでいる。感染防止対策を講じて、入居している伴侶と階下の小規模利用者の面会支援は利用者の閉じこもり防止となり、主治医や訪問看護との連携で重篤な症状が改善して3年目の入居者は、開眼ミキサー食を経口摂取されている。先月逝去された入居者は、前日まで職員と会話し好きなカラオケで歌う動画に、家族から謝辞があった。地域の店舗と連携し、園内で開催した夏祭りのマルシェは買い物をしたいとの入居者の思いを叶え、自己決定や選択の場や機会となり、入居者は満面の笑顔であった。人との繋がり「縁」を地域や職員の「円」で支え、日々の生活を研修参加や資格取得で得たスキルや知識で支「援」している。新型コロナウイルス収束で、地域の方々との自然を大切にする「園」や集える「宴」を願いながら、さらなる地域密着型サービスの展開が期待できるホームである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
58	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	65	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,21)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
59	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,40)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	66	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
60	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりの拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
61	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:38,39)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:51)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:32,33)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
64	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:30)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

ユニット/
事業所名 さくらユニット/グループホームえん

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	今年度、経営理念伝達に取り組み、全職員を対象に他の事業所と共に意見を交換しながら改めて(株)EPOの経営理念を理解し、共有することに取り組んでいる。ここから、さらに事業所の理念についても話し合えるきっかけとなった。	経営理念の「介護の仕事に夢とプライドを」を全職員と共有しながら、基本方針である5つの「えん」の具現化に取り組んでいる。系列事業所から異動して1年目の職員は、繋がる「縁」やチームワークなどの「円」、質の高いサービスを提供する「援」などを、篤く語った。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	今年度、運営推進会議も中止が続き、地域の方との交流も持つ機会がなかった。町内会の状態などは回覧板や電話などで情報を得ている。	コロナ禍の中、地域公民館で階下の小規模事業の職員が、健康講座の講師を努めたり、職員の知り合いの地域の店舗と連携し、夏祭りは園内でマルシェを開催している。来月は市民センターで開催されるスポーツフェスタに出かける予定である。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	外に出る機会がなく情報の発信なども行えていない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議は開催できず、報告書という形態で現状をお知らせしている。今まで皆さんの意見や困りごとなどを聞くことができたが、報告書を送ることにとどまっているため、何か意見が反映できるような工夫を検討している。	昨今の状況から、定期的に入居者の状況や暮らしぶりを写真を添えてメンバーに送付し、会議録は玄関で公表している。会議は地域の情報や率直な意見を伺う機会のため、来月半年ぶりの開催を管理者達は喜んでいる。	運営推進会議設置目的に鑑み、会議内容を全家族に送付し、さらなる意見表出の機会を設けられ、運営に活かされることを期待します。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業の実情やケアサービスの取組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	公的機関からのアンケート調査などは細かく答えるように意識している。	毎月市担当者にFAXした居室情報は市のホームページに掲載され、医療連携室からの問い合わせで入居に至ることが多く、日頃から情報提供などで連携に努めている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束防止については、特にスピーチロックゼロに向けて研修や話し合いを行って取り組んでいる。外部研修の他に当施設での気となる発言や行為についての検討などを行い、より良いケアに繋がるように努力している。	全職員に実施した身体拘束や虐待に関するアンケートを集計し、職員会議で話し合う予定である。不適正な言動について話し合いを重ねたことで、口調が変わる等意識が変化している。「帰って良いか」と尋ねる入居者に、「一緒に帰ろうね」と、気持ちを理解した対応を実践している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待の防止は身体拘束防止とともに、常に周りが意識し気づきにくい小さな事柄にも目を向け話し合いや意見が言える環境をつくっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(6)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	今回は外部研修に参加後、フロア会議で研修内容を発表した。どういう時に成年後見制度などが必要となるのかなど意見交換を行い理解を深めた。	市主催のオンライン研修に参加した職員が伝達研修を行い、制度の理解を深めている。現在民間の制度を利用している入居者は、後見人の名前を聞いただけで表情が輝くなど、篤い信頼を寄せている。	
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	今年度は併設の小規模多機能のご利用者のご入居がほとんどで、事前の情報も十分に活かしながら不安や疑問を解消し契約できている。分かり易い言葉で契約内容や重要事項の説明を行っている。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	直接の話だけでなく、メールやLINEでのやり取りでなるべく多くの意見を聞けるようにしている。	年4回発行されていた明星新聞が休刊となり、家族には電話やIT機器を活用し、暮らしぶり、入居者や職員の新型コロナウイルスワクチン接種や職員のPCR検査状況などを報告し、意見の表出をお願いしている。	運営に関する具体的な意見の表出を促すために、行事開催までの経過や運営状況などを、ホーム便り等での定期的な報告や、多機能ホームえんとして家族会の発足も期待します。
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	フロア会議はなるべく職員の意見が引き出せるように言葉を投げかけている。また日頃の会話などからも、困りごとや相談がしやすい環境になるように心掛けている。	定期的にグループホーム独自でフロア会議が開催され、提案された意見が法人運営に反映されるシステムが構築されている。職員が提案した福祉用具は使い勝手を検証後に導入され、3モーター付の介護ベット購入が実現している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人事考課システムも活用を継続して行っている。評価についての統一を図るために、管理者研修などを行っている。さらにここから、昇給システムの紐付けに繋げている。		
13	(9)	○人権の尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。 また、事業所で働く職員についても、その能力を発揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	職員の採用に当たっては、年齢や性別による排除などは行っていない。それぞれにあった勤務体制を整え、長く働きやすい環境を整えるように努力している。	夜勤専従を含め20代～60代までの男女の職員が勤務している。介護福祉士の試験に備えて休みを推奨したり、人材紹介で入職した介護の経験が無い職員は研修受講後正規雇用となり、訪問看護に従事していた看護師が介護職員として勤務するなど、法人理念の「介護に夢とプライドを」を持てる職場づくりを実践している。	
14	(10)	○人権教育・啓発活動 法人代表者及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	どういったことが差別につながるかなど職員会議の場で話す機会を設けた。	認知症状の進行に伴い、職員の言葉遣いが変わるなどの事例を通じて、人権教育や啓発活動に取り組んでいる。不適切な言動はその場で個別に指導しているが、入居者のみならず職員離職の誘因となるため、関連アンケート集計結果を職員会議で話し合う予定である。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○職員を育てる取組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	それぞれの職員に合わせ、なるべく気づいたことは早くに指導するようにしている。未経験の職員の入職もあり、まずはご入居者にしっかりと関わって頂き、その中から認知症の方の理解につながるように指導している。ほかの職員にも指導にあたってもらうことで、自身の振り返りに繋げている。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会をつくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取組みをしている	グループホーム連絡会などは開催延期の状況。電話やメールでのやり取りとなっている。サービスの質を向上させるまでには至っていない。		
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	今年度の新規ご入居者は階下の小規模多機能のご利用者でご家族の要望や不安など細かく入手することができた。改めて話を深め、ご入居者により良い支援の提案をおこなっていった。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご入居にあたっては、ご家族との話の中でグループホームの生活をマイナス要素も含め説明を行い、できるだけ要望に添えるようにケアプランを提案した。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ご本人を中心に考え、プランを想定することで、真に必要とされるサービスを見極めるように心がけている。迷った時などは他の管理者などにも意見を求めるようにしている。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	生活の中でできることは手伝っていただいたり、知恵をお借りしたりしながら今までの生活歴を活かせるようにしている。こちらから「ありがとうございます」「お世話になります」と感謝の場面を作るようにしている。		
21		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	通院支援や買い物などは協力していただく事がある。また、手紙や電話などでやり取りをする中で家族との絆を切ることの無いようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	緊急事態宣言が適応されている間は感染防止対策のため面会は中止となっている。ご家族には今まで同様に電話やメールなどでご様子を知らせている。	感染防止対策を講じて、入居している伴侶と階下の小規模利用者の面会支援は利用者の閉じこもり防止となっている。これまで、メールやテレビ電話等で家族との関係継続を支援してきたが、来月から家族に来所前の連絡、人数や時間を制限した面会をお願いしている。	
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	ご利用者が他の方の不穏な行動や、転倒の危険がある行動などに対して職員に知らせてくれたり、話し相手になってくれたりする場面がある。「どうしたの」「おしっこに行きたいの」など困っている様子に声をかけて下さったりしている。		
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約終了の理由に違いがあるが、常に今後の困りごとなどの相談しやすい関係づくりをご利用中から心がけている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
25	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日頃から会話の中で思いを探るように心がけており、気づきなどがあれば各職員が報告してくれている。カンファレンスでは職員の意見や気づきが多く聞かれる中、ご本人により良い支援を導き出すようにしている。	階下の小規模事業者を利用後に入居に至る場合が多く、生活歴などの把握が容易となっている。職員をユニット毎に固定せず、全職員で思いや意向の把握に努め、入居者の買い物をしたいとの思いを夏祭りのマルシェ開催で叶えている。	把握した意向や思いを随時介護記録に整備し、さらなる意向や思いの把握を期待します。
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	今までの暮らしを聞き取り、できるだけ活かせるようにしている。急な環境の変化からの不安を少しでも軽減できるよう努力している。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	ご入居者の残された能力を再確認し、職員全員がその能力の維持に努めるように処遇の統一を図っている。どんな小さなことでも、残された能力としてとらえられる視点を共有できるように指導している。		
28	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	日々の申し送り、毎月のモニタリングなどで早めに変化に気づき話し合っている。ご家族からの意見や意向に関しては、電話やメールで行っている。	入居者や家族の意向を重視した介護計画を作成し、状況の変化に応じて計画を見直している。先日老衰で逝去された方は、痛みで食事が減り、起床できなくなっていたが、好きなカラオケに誘って歌ってもらったり、少しでも口のできる食事を用意するなどの支援が展開していた。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケース記録の重要性とその内容については常日頃から指導している。特にご本人の様子がわかる表情やご本人の言葉を大切に、誰が見てもわかるような記録を残していくように話している。		
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	サービスありきではなく、ご利用者が今、何が必要でそのためにはどのような事が提供できるのかと考えサービスの提供を行っている。新しい情報や意見などはこれまでの繋がりなど利用している。		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍の中で開催した夏祭りには、感染対策を行ったうえで近くのコンビニからの出店の協力を得てご利用者に買い物を楽しんで頂いた。		
32	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医はお一人がこれまで同様に総合病院に定期的に受診している。他の方は医療連携を図っている3名の先生にそれぞれ往診いただいている。	入居者希望の医療機関受診は家族に同行をお願いしているが、状況に応じて職員が同行している。月2回の訪問診療を受けている入居者が多く、妄想や杖で戸を叩くなどの言動を随時報告し、内服薬について相談している入居者もある。	
33		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	訪問看護師が週に1回訪問し、状態観察を行っている。必要に応じて処置や採血、爪切りなどを行っている。		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入退院に関してはご本人の生活状況やADLなどの情報提供を行っている。ご家族に代わって、必要物品などを届けたり退院前カンファレンスなども参加して退院後の生活を支援している。		
35	(15)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に重度化や終末期ケアについては必ず説明を行い、ご本人やご家族に意向を確認している。その時点では、どのように判断していいかわからないご家族もおられ、終末期には改めて説明を行い、ご意向に添った支援を行っている。	主治医や訪問看護との連携で重篤な症状が改善して3年目の入居者は、開眼しミキサー食を経口摂取されている。先月逝去された入居者は、大腿骨骨折で入れたボルトを抜去後も痛みが継続し食事が減り起床できなくなり、家族に状況を説明し、意向を確認している。前日まで職員と会話し好きなカラオケで歌う動画に、家族から謝辞があった。	重篤な症状が改善し小康状態となられる入居者もあることから、今後も主治医や訪問看護との連携で終末期症状を常に確認し、家族の意向をその都度確認しながら、より良い最期の模索を期待します。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時対応マニュアルを作成し、入職時には必ず説明をしている。マニュアルはスタッフルームにおいて、すぐに確認できるようにしている。応急処置や緊急時の初期対応などは日頃からも繰り返し指導している。		
37	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	今年度は2回の避難訓練のほかに、災害時を想定した食事や階段の使用が困難な方の垂直避難訓練を行った。	階下の小規模事業所との合同で水害を想定して実施した垂直避難は、入居者を背負う紐が課題となり、消防署からアドバイスを受ける予定である。非常食のカップ麺の介助はスプーンが必要とか、お湯の節約には袋麺の麺を砕いてなどの実施訓練ならではの経験を、ライフラインが止まることも想定される災害対策に活かす予定である。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
38	(17)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	このグループホームがご入居者にとって安心できる場所であることに心掛けている。おひとり、おひとりを尊重した支援となるように声掛けにも十分に配慮した対応を常に意識できるように研修も重ねている。	入居者を氏名で呼称し、不適切な言動について繰り返し話し合い、職員が一丸となって安心できる場づくりに励んでいる。職員が介護のプロとして誇りを持って提供するサービスで、入居者の人格の尊重や誇りの保持に努めている。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	外出の機会が減った分よく話を聞くことができた。その中でどのような思いがあるのか、何かしたい事や行きたいところはないかなど聞いていた。言葉がうまく構築出来ない方には選択していただく形をとるなどしていた。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	すべて希望通りにいかないだけでなく、我慢していただくことが多いように思える。その中でも、なるべく笑って、ストレスを少しでも少なく生活していただいている。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	未だに季節感のない洋服を着せている職員がいるがその都度指導を行い、気を付けるようにしている。女性のご入居者には入浴後に保湿剤を塗ったりのほかに、ご希望のある方には化粧水や乳液を購入して今までのように身だしなみを整えて頂いている。		
42	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	調理レクでは、ご入居者に食べたいものを聞き取り入れている。春には園庭でバーベキューをして楽しんだ。日々の食事もミキサー食であっても彩りなどに気を付け美味しく食べて頂けるように盛り付けている。	5月は野菜を切ったりちぎってバーベキューを楽しむ、料理レクでは希望の瓦蕎麦を作り、おやつ芋ティラミスは完食となっている。夏祭りのマルシェでおにぎりなどの好みの昼食を選び、スイカ割りに挑戦するなど、食事を楽しむ機会や場づくりが行われている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事は施設内で調理した栄養バランスの取れた温かい食事が上がってくる。それぞれに合わせた食事形態で摂取しやすいように工夫し、食事量や水分量は毎食記録をして観察している。お茶などが嫌いで水分摂取の難しい方にはジュースなどで摂取量を確保している。		
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	ご希望のある方には訪問歯科をご利用いただいている。毎食後の口腔ケアはそれぞれのご利用者にあわせ、全介助・一部介助で保清に努めている。		
45	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	トイレでの排泄支援を続けているが夜間に関しては、PTイレの使用やベッド上でのパット交換のみの方も数人いる。症状の進行から二人介助での対応も増えている。	排泄が自立している入居者もある。トイレの場所を分かりやすく掲示しているが、風呂場の排水溝に放尿する入居者もあり、すぐに洗浄している。時間や排泄時のサインでトイレに誘導し、失禁が減ったり日中のみ布パンツと尿取りパット使用となっている。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	変わらず、それぞれの方に応じた緩下剤の服用で排便コントロールを行っている。日頃の水分量や腹部マッサージ、排便時の姿勢などを考慮して、自然排便につながるように心がけている。		
47	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた入浴の支援をしている	週に2回の入浴は夏場はご本人の好みに応じてシャワー浴か一般浴を選んで入浴して頂いている。時々は入浴剤を使って温泉気分を味わっていただき楽しみを広げている。	週2回を目途に、入浴剤を変えなどの工夫で入浴を支援し、入居者とゆっくり話ができる機会にもなっている。毎日浴槽にお湯を入れているため、妄想があり入浴を拒否する入居者が「入る」と話される場合は、間を置かずすぐに支援している。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	夜間の良眠を図るためにレクリエーション等を楽しんで頂き、日中の活動をする事で昼夜逆転の予防にもなっている。休息や午睡をもいつでもとることができる状態にしている。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	ご利用者の変化や気づきなどの報告があれば、すぐに対応し、必要に応じて主治医からの指示や処方を受けている。申し送りノートなどの活用で全員が把握できるようにしている。		
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	毎日変わらない生活ではあるが、その中でも楽しく話したり、ことわざ遊びなどの脳トレを楽しんだりしている。家事活動においてはおひとりの方が「私でも役に立つかね」と積極的に手伝ってくださる。職員からの感謝や労いの言葉は皆さん喜ばれている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51	(21)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	どこか行きたいところや思い出の場所などの話はしているが、外出などは出来なかった。	コロナ禍に配慮しながら、初詣や桜の花見のドライブに数名ずつ交代で出かけている。ヤフードームでの野球観戦の公募抽選は残念ながら外れたが、来月見学予定のスポーツフェスタで披露される子供会による太鼓演奏は、コロナ禍以前は園前で披露されていたため、入居者は楽しみにしている。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	今はおひとりの方がお金を数千円所持しているが使う場面はなく、職員に欲しいものなどを頼んでいる。また、今年の夏まつりでは出張コンビニでご自分でお金の支払いをしていただき、買い物を楽しんだ。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	手紙のやり取りは難しいが、年賀状を書いて送ったりしている。電話は希望があったり、家族が恋しそうなときにはこちらから電話をして、お話していただいている。		
54	(22)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	室温や湿度の調整を行い快適に暮らせるように心がけている。季節感を感じていただくような工夫が足りないが、安全に生活していただいている。	玄関は地域の方から頂いた蘭の花が飾られ、クリスマスツリーが入居者達の飾りつけを待っている。共用空間には入居者の写真が掲示され、厨房の前の食卓や椅子、窓際にはソファ、ソファ前にテレビが設置されている。食後ソファで仲良く談笑する入居者もあると、管理者は話している。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ほとんどの時間を過ごすフロアでは食席以外では、それぞれ気の合った人が隣り合い座ってテレビを見たりしている。テレビに興味のない方はテーブル席で塗り絵や作品作りなど自由に過ごされている。		
56	(23)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	清潔な環境作りに心掛け、整理整頓を行い安全な場所作りをしている。洗濯物などもすぐに片づけ出したままにしない、など小さなことの継続を行っている。	感染防止に配慮し、居室は視認せず管理者から聞き取りをした。居室入り口に表札を掲示し、仏壇や筆筒、椅子を持ち込み、掃除機をかけられる入居者もある。1～3モーターの電動ベットを配置し、入居者のADLIに応じた居室作りを支援している。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	建物全体に手摺を設け、安全に歩行できるようにしている。洗面所は3か所設け、介助の必要な方と自立された方が同時に使用できるようになっている。トイレなどの場所も分かり易いように手前に貼り紙をして、一人でも排泄が済ませられるようにしている。		